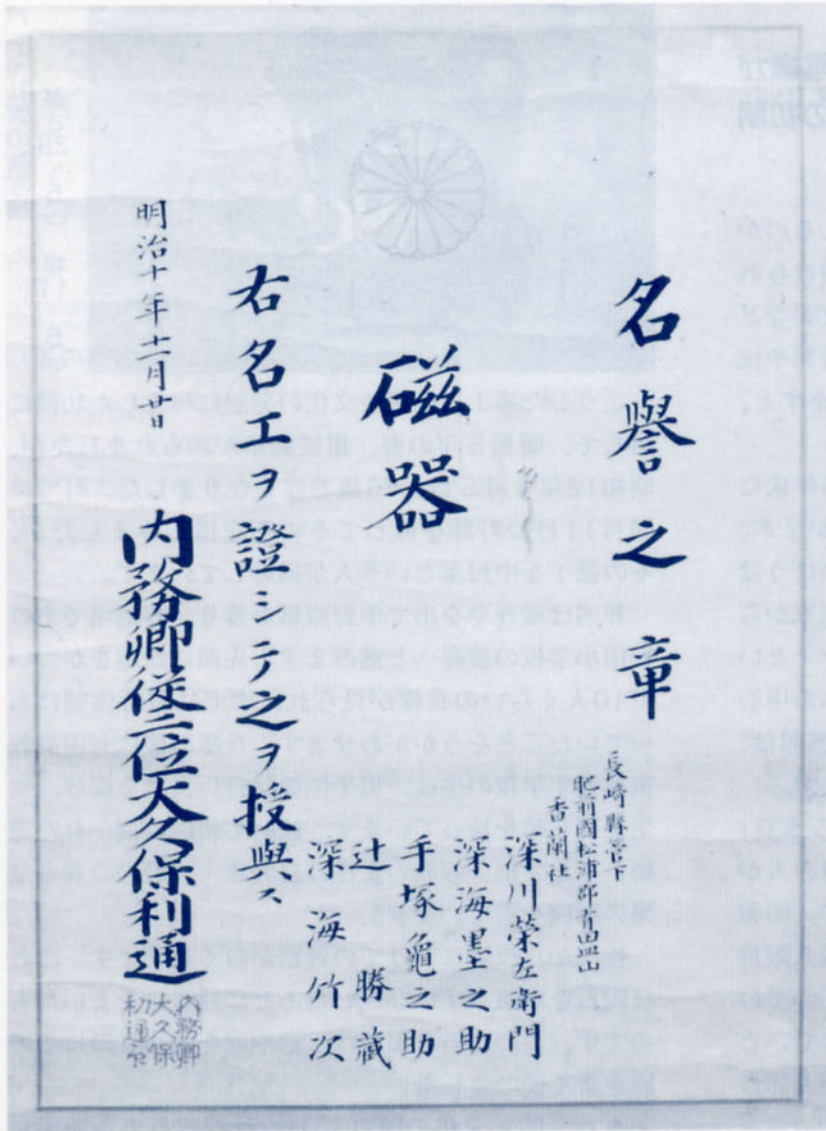




写真の褒状は香蘭社の貴賓室に展示してあります。産業振興を国づくりの基本とした明治政府の初代内務卿大久保利通が、有田窯業界を先導する五人に贈ったものです。標題に「名誉之章」とあり、「名工ヲ證シテ之ヲ授與ス」と結んでいます。時は明治十年。ちょうど百二十年前のことです。

受賞者の顔ぶれを見ますと、八代深川栄左衛門は幸平の陶家。深海墨之助と深海竹治は深海宗伝の流れを汲む年木谷の名窯の兄弟。手塚亀之助は大樽の陶磁器商。辻勝蔵は上幸平の極真焼の伝統を誇る窯元。いずれも当時有田皿山を代表するエリートたちです。没年から逆算して、最年長の栄左衛門が四十代の他はいずれも三十歳前後。文明開化の潮流に乗り遅れまいとの情熱をたぎらせた、青壮の面々でした。

この年、明治政府は夏から秋にかけて、東京・上野公園で第一回内国博覧会を開催しています。四年前のオーストリア・ウィーン万国博に刺激されての国家的な企画で、わが国最初の見本市でもありました



た。出品点数は八万余。その中で有田焼がひとときわ光彩を放ったことが「名誉之章」になったものでしょう。五人は明治八年に設立された、合本組織香蘭社の出資社員でもありました。家内工業的レベルにあった有田の窯業を近代化するための実験でした。商法という会社がまだないころ。資本を持ち寄った合同企業を合本組織といったのですが、その積極策が出品した磁器の出来ばえと同時に評価され、『名工』の美称による表彰となったものでしょう。

ところがこの五人は、明治十二年に早くも分裂。深川栄左衛門は新しく合名会社香蘭社を経営、あとの四人は、精磁会社という名の企業連合を上幸平に設立します。経営上の意見の違いがあつたとはいえ、余りにも早い仲間割れでした。けれども、両社こそ良きライバルというべきで、競ってヨーロッパから新鋭の機械や技術の導入を図るなどして、有田窯業界の飛躍のためにいずれ劣らぬ足跡を残したのでした。



「名誉之章」前後についての史料は、有田町史の陶業編II・商業編IIにあります。また中島浩氣著「肥前陶磁史考」、香蘭社社史「有田窯業の流れとその足あと」、松本源次著「有田陶業側面史」(明治編)にも関連の記述があります。ご参考までに。

皿 山 秋 No.35

フィルムが語る

フランス製映写機が記録した昭和の初期

過去の大きな出来事や人々の業績などを伝えるのが歴史ですが、それは史料とよばれる証拠に裏付けられていなければなりません。その史料には、古文書など文字による史料のほかに、発掘された考古学資料や伝世の民具などがあります。さらに近代になりますと、写真や動く画像などが加わりました。

有田町歴史民俗資料館には昭和初期から30年代にかけて撮影された映写機の16ミリフィルムが2本、9.5ミリフィルムが52本あります。9.5ミリのほうは映写機といっしょに中の原の旧家・久富桃太郎家から寄贈されたものです。映写機はフランスのパティというメーカーの製品で、コマ送りの穴がフィルムの中心にあります。フランス製の撮影機や映写用の機器は、大正12年、3年ごろ輸入されたといわれています。

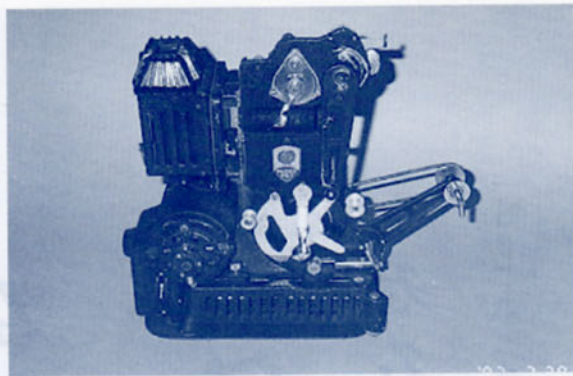
52本のフィルムのうち約半数は「勇敢なる水兵」「親指姫」など市販のフィルムで、残りは有田の人が撮影した町や久富家の歴史にかかわるものです。昭和初期に行われた町内の道路改修祝賀会の模様、八阪神社の鳥居建立、お供日の道行などの記録は、かつての有田皿山の人たちの生活や習慣を鮮明に伝えています。中でも多くの情報を伝えているのが久富季九郎さん（雅号・不孤）の町葬の様子です。

久富季九郎さんは明治末期から昭和初期にかけての久富家の当主で、文久2年7月の生まれ。父は在野の経済学者正司考祺の四男、金ヶ江利平鎮道。母は有田の窯焼きとして海外輸出に先鞭をつけた久富昌保の妹タミ。その三男でした。

明治44年（1911）に中の原に蔵春亭久富製磁所を開きますが、清新な感覚の持ち主だったらしく、いち早く石炭窯を導入して本格生産に成功した外、工場の情報公開に踏み切り、修学旅行の小中学生にまで製陶の過程を見学させるなど、画期的な試みをしています。また、有田小学校が実業科を設けた時には多額の実習費を寄付しています。



パティ社製の映写機
高さ32cm
幅9.5cm



パティ社製の映写機
高さ28.5cm
幅11.5cm

こうした郷土の産業や文化の発展に尽くした功績に対して、昭和5年の春、紺授褒章が贈られましたが、昭和12年4月5日、76歳で亡くなりました。町では同月11日に町葬を催してその死を惜しみましたが、その様子を中村潔という人が撮影しています。

葬列は蔵春亭を出て中野原橋を渡り、葬儀場である有田小学校の校庭へと進みます。先頭に鉄砲をかついだ10人くらいの兵隊が見られ、すでに戦時体制にあっていたことをうかがわせます。兵隊の後に有田高等実業青年学校の生徒。男子生徒は白い長旗を掲げ、女生徒は花輪を持っています。続いて親族に抱かれた遺影、そして柩。親族の女性は白装束、一般の会葬者は黒の羽織を着ています。

校門から校庭にかけての通路が白く見えます。これは陶石を水簸（すいひ）したあとに残る砂をまいたものです。このころ有田では、道や庭を清めるのにこの砂をよく使いました。

また、昭和7年の国道33号改修祝賀行事を撮影したフィルムを見ますと、子どもたちが旗行列をしているそばを、クラシックな自動車が通り過ぎます。もうそのころは、急ぎの要件の時などには自動車が使われていたのでしょう。

以上のような情景は、今日では全くといってよいほど目にすることが出来ません。フィルムは無声ですが、言わずして皿山の歴史を語りかけています。これらのフィルムを当時の町民は興味深く見たことでしょう。日本に撮影機や映写機が輸入されてまだ間がなかったころ、それが有田に早々と入って、町民に話題を提供していた事実が驚かされます。昔から有田の人は新しいもの好きだったのです。

有田町歴史民俗資料館に寄贈されているパティ社製の映写機は2台。高さが32㌘、幅が9.5㌘と高さ28.5㌘、幅11.5㌘。形は少し違います。2台とも今でも動きます。大正時代に輸入された映写機が現存するだけでも珍しいのに、動くとなると一層稀だそうです。9.5ミリフィルムはビデオテープに再生してあります。なお撮影機は有田小学校百周年記念館に保存されています。

（参考文献・久富二六著「わが家の歴史」など）

国指定史跡 天狗谷窯跡 の保存工事

ようやく脱した 遺産損壊の危機

白川地区に位置する天狗谷窯跡は、有田の古窯跡の中でも群を抜いて知名度の高い窯場です。昭和40年～43年に発掘調査が実施され、当時は日本磁器発祥の窯として注目を集めました。しかし見学者への配慮から、その後も埋め戻されなかったため、30年以上という時の移ろいととも、かなり損壊箇所が目立つようになりました。そこで有田町では窯体を保護するため、昨年度から保存工事を実施してきました。この工事もようやく完了しましたので、今回はその概要について紹介してみることになります。



保存工事前の状況

1. 天狗谷窯跡の位置付け

有田といえばまず磁器が連想されるほど、両者には深いつながりがあります。日本の磁器は、今からおよそ380年ほど前にこの有田の地で誕生し、そして国内各地に技術が広がって行きました。つまり、現在日本の各地で生産されている磁器も、実はそのベースの部分では、すべて有田磁器との結びつきを持っていることになります。

天狗谷窯跡は、そうした磁器生産の初期の様相を今に伝える重要な窯場として、昭和55年に国の史跡に指定されています。この窯は調査・研究の進んだ今日では、磁器創始の窯でないことは明らかになっています。しかし、磁器生産を産業と

いうレベルで実践した最初の窯場であった可能性は極めて高く、これはもう一つの磁器創始といっても過言ではありません。つまり産業レベルでの生産システムの確立なくしては、原料や製作技術があっても、産地の維持や発展は望むべくもないからです。したがって、磁器質製品の創始窯としての位置付けを失った今でも、この窯の重要性は不変です。

2. 保存工事の概要

工事は、平成8年度に老朽化した窯体周囲の柵の作り直しと説明板の改修を行い、本年度は窯体の埋め戻しを実施しました。

窯体の保存工事は草刈りを行った後、全面に土木シートを被せ、窯体の凹凸に合わせて土のうを積んで行きました。ここで用いた土のう袋は、年月が経つと腐食してしまう特殊なもので、積み終えた後はパーナーで表面を焼き、芝を植えています。今年の夏は予想以上に雨が降ったおかげで、心配した芝も順調に根付き、今では一面鮮やかなグリーンの斜面へと大変身、旧状との違いは一目瞭然です。一度足を運んでみてはいかがでしょうか。これで一応損壊の危機は脱しました。今後は、こうした有田を有田たらしめている遺産をどういう方向で活用し、そのためにはどうすることが必要か。有田の将来のためにも、じっくり皆さんで考えてみてください。



保存工事後の状況



発掘調査時の状況



ぎおんまんじゅう を作ってみました

台風が近づきつつあった7月26日(土)の午後、ぎおんまんじゅうの作り方を体験しました。教えてくださったのは“まんじゅう作りの名人”松尾豊子さん(戸矢)です。

夏の夜の楽しみである「ぎおん(祇園祭り)」は地区の氏神様の祭りで、今も盛んに行われています。以前は自宅での宴の配り物や家庭で食べるためにぎおんまんじゅうを作り、それを持ってお使いに行くのは子供の仕事でした。「まんじゅうもうまかったばってん、お駄賃をもらうのがうれしかったあ」という話をよく耳にします。

まんじゅうの下に敷く葉を、この地方では‘がんびあー(サルトリイバラ)’といいますが、焔博記念堂周辺にたくさん自生しているものを歴史と文化の森組合の大串事務局長より頂きました。

最近では家庭で作ることもめっきり少なくなりましたが、今回なつかしい味の再現という企画で開催しました。参加者の方々には思っていたより手軽に出来ること好評でした。

(作り方の手引きをご希望の方は歴史民俗資料館までご連絡ください)



豊子名人〔右から二人目〕の鮮やかな手さばきを見る受講者たち(有田町勤労者福祉会館・2階調理室で)

●●● 寄贈資料紹介 ●●●

- ◆ミシン 一式 有田町 永瀨 操様
- ◆養蚕用具 他3点 有田町 岩永正己様
- ◆屏風 一隻 埼玉県 松本庄一郎様
- ◆匣鉢 3点 有田町 今泉今右衛門様

ありがとうございました。



今号から館報を改題して『季刊皿山』とし、装いを多少新しくしましたが、「編集後記」をベンジャラとします。

有田皿山では磁器の破片のことをベンジャラギレまたはベン

ジャラギン、さらには簡単にベンジャラといいました。紅皿の破片というほどの意味で、女の子はままごとのお金にしたり、腕白小僧は母親に「川の中では注意しないとベンジャラで怪我をするよ」と注意されました。川床にベンジャラがよく捨ててあったからで、せせらぐ小川に沈む赤絵や染め付けの破片は、皿山の情緒の添加剤でもありました。

そこで俳人の岸川鼓蟲子さん(幸平)に、ベンジャラを詠んだ句はありませんか、と尋ねたところ、ならば即席でと、

きらめけるベンジャラギレや川澄みて

鼓蟲子

と、こだまするように詠まれました。川澄みて、は秋の季感です。

◆
フロントページの「町史の行間」で、有田皿山の明治期を彩る合本組織香蘭社の分裂前後について簡単にふれましたが、深川栄左衛門と手塚亀之助たちとの論争には、今日の経営にも教訓を与える内容があります。

手塚と深海(墨)はフィラデルフィアの、深川はパリの万国博覧会に参加し、欧米の高い製陶技術を目のあたりにしました。そこで経営と技術の革新を図り、有田の陶業に新生面をとったのですが、実践編にいたって対立が生じたのです。手塚たちは国の援助を受けて設備を改善し、美術品を重点にした輸出で収益増をと主張しました。これに対して深川は「求めやすく用いやすい」日用の器具こそ肝心だといひ、設備に官の助けを借りるなどは弊害百出につながる、としました。

いずれかに軍配を上げるか。それは史料をどう読み取るかで違ってきます。「事實は神聖であり、意見は勝手である」という歴史家の言葉があります。人によって解釈が違ってこそ、歴史を読む楽しさがあります。

季刊『皿山』(改題)

通巻35号(平成9年9月1日)
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185